つらい時代

コウタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
つらい時代

【Ｎコード】
Ｎ２１０７Ｋ

【作者名】
コウタ

【あらすじ】
「競争！　競争！　競争！　競争こそが子ども達の人格を育てるのだ！」――子ども達にひたすら競争をさせようとする教育者と、その息子の物語。

「競争！　競争！　競争！　競争こそが子ども達の人格を育てるのだ！　教育とはすなわち、子ども達に競争させ、優秀な人材に育てることなのだ」

こう強弁したのは、熊のように大きい男、中澤洋一だった。彼はとある私立中学校の校長だった。職員室では、教師達が真剣に彼の言葉を聞いていた。

「競争！　競争！　競争！」校長はいった。

「競争！　競争！　競争！」教師達もいった。

熱心な教育者達よ、あなた方の教育方針が子ども達に何を与えることになるか知っているのか？

中澤には子どもが一人いた。達哉という15歳の少年だった。達哉は成績がいつもトップで、スポーツも得意だった。絵画は金賞をとり、学校は休まず皆勤賞をとる、誠に申し分のない優秀な子どもだった。

穏やかな春のある日、父親は息子を叱りつけた。

「なんだ、この漫画は？」洋一はきいた。

漫画の単行本が達哉の机の上に重なっていたのだ。

「これは、クラスの子に借りたものだよ」

「高校受験の戦いはとっくに始まっているんだぞ。こんなくだらないものを読んでいる暇があるのか！」

「ごめんなさい、明日すぐに返してきます」

「決して遊んではならない。競争に勝つには、他のものが遊んでいる間にどんどん前に進むことだ。競争に勝ちなさい。なんとしてもだ」

「はい」

「優秀なお前のことだから分かっていると思うがな、この世はすべからく競争で成り立っているのだよ。生活の質、豊かさ、幸福、自

由、こうしたものは全て競争の結果によって与えられ、または奪われる。わかるな？」
「はい」
「負けたいか？　勝ちたいか？」
「勝ちたいです、父さん」
「勝て。必ず勝つんだ」
　こうして、まるでサッカーの決勝に向かう監督と選手のようなやりとりがあった次の日、達哉はクラスメイトの女の子に漫画本を返した。
「え、もう読み終わったの？」と岸田愛美はいった。
　ツインテールの彼女は達哉に漫画を貸していたのだ。
「いや、やっぱり読むのやめたんだ」
「どうして？」
「忙しいんだ。勉強しなきゃ」
「そっか……。面白いのになー。この子可愛いでしょ？　メロメロンっていうんだよ」
「メロメロン？　動物？」
「召喚獣」
「ショウカンジュウ？」
　その時、教室に次の授業の男性教師が入ってきた。
「くだらん漫画の話をしてる暇があるのか？」
　その教師は教室に入ってくるなり、まことに結構な忠告をした。
「メロメロンだがなんだかしらんが、そんなもん憶える暇があったら、英単語の一つでも憶えたらどうだ？　高校に落ちた時と受かった時のことを想像して見ろ。天国と地獄だぞ？」
「はい……」二人は返事をした。
　達哉はしばらくメロメロンが頭につきまとった。

　彼らの住む同じ街に、高橋健という４０歳ぐらいの男がいた。彼は日雇い派遣で食いつないでいる毎日を送っていた。今日は、製本

会社で一日中製本機の前に立ち、機械のように同じ動作を続けた。日が暮れ、夜になり、お金を貰って製本会社を出た。
たった一人で家に向かう。夢も希望もなかった。ただ毎日、日雇いの仕事で食いつなぐだけだった。
アパートの近くに来た時、塾から帰る子ども達とすれ違った。その中に達哉がいた。達哉はチラリと高橋健を見て、敗者の姿だと明白に分かった。
（ああいうふうになったら……おわりだ！　何もかもおわりだ！）

それから夏が過ぎ、１１月になった。達哉は塾の帰り、あのアパートの近くを通った。ふと、アパートの前の歩道で、人が倒れているのを見た。達哉は近づいてみた。いつか見た貧乏人だった。まるで寝ているようだ。
「あの、大丈夫ですか？」達哉は声をかけた。
高橋は目を開け、力無く笑った。
「どうしたんですか？」達哉はきいた。「このアパートの部屋に入らないんですか？」
「ああ、そうだな……」
高橋健はゆっくりと起きあがった。
「酔っぱらってアパートの前で力つきて寝ちまってた」と高橋はいった。
ふらふらとアパートの部屋へ行こうとするが、倒れそうになった。達哉は高橋の腰を支えた。
「何号室ですか？」
「１０２。すまねぇな」
達哉は高橋を部屋に連れて行った。部屋の電気を点け、高橋が床に腰を下ろした時、達哉ははっと驚いた。
「どうした？」と高橋はきいた。
達哉は一つの写真立てを見ていた。そこに入った写真には、小学生の頃の岸田愛美と、今床に腰を下ろしている男が並んで写ってい

た。まるで親子だ。
「この子は、娘さんですか？」達哉はきいた。
「ああ、そうだよ。今は一緒に暮らしてないけどな。知ってる子か？」
「はい。僕のクラスメイトです」
「本当か！　そりゃ嬉しいな。仲良くしてやってくれよ。いい子だろう？」
「ええ」
「今は一緒に暮らしてないけどな。離婚したんだよ。俺の会社が潰れた時にな、妻の家族が、俺と別れるように妻を説得したんだ」
達哉はあっけにとられた。
「こんな話、まだ早いか……」高橋はつぶやいた。
「さ、もう帰りなよ」
「はい」
達哉はアパートを出た。

達哉は有名な進学校に合格し、もうすぐ卒業式となった。
「合格おめでとう、達哉君」と愛美はいった。
「ありがとう。岸田も合格おめでとう」
「ありがと。これから、あんまり会えなくなるかなぁ。達哉君のとこ、進学校で忙しいでしょ？」
「うん。そうだと思う」
「がんばってね」
「うん、がんばるよ」
「うん……」

そして、達哉は再び競争の渦に巻き込まれていった。頭に知識を詰め込み続ける三年間を過ごし、大学に合格した。そして彼は二十歳になった。
冬のある日、父は息子にいった。

「大学を出た後、A社に入らないか？　エリート中のエリートが集まった会社だ。私の知り合いが社長をしている。入社する意志があるなら、内定を約束してやろう」
「はい。お願いします」
「いいのか？　もっと考えてからでもいいんだが」
「構いません。入社いたします」
「そうか。それじゃあ、さっそく明日、A社に挨拶に行ってくれ」
「分かりました」

翌日、達哉はA社に行った。社長室で達哉は挨拶を始めたが、社長は遮った。
「あー、堅苦しい挨拶はいいから」と社長の浜田はいった。「早速一つ、仕事を頼みたいんだが、いいかね？　インターンシップみたいなもんだ」
「はい、承ります」
「ある工場長にな、その工場の閉鎖を伝えてきてくれ。光九町（こうくちょう）にある、私の会社が持つ工場の一つだ。そこの工場で働いてる人間達は全員解雇する旨を伝えてくれ。工場長を含め全員だ、例外はない。オーケー？」
「了解しました」
「じゃ、よろしくねー。もう行っていいよ。バイバイ」
達哉は会社を出ると、光九町へ向かった。そこは、達哉が中学生の時に通っていた塾のある街だった。
工場に着くと、工場長に合わせてもらった。
工場長が来ると、達哉は驚いた。
「あなたは、以前私とお会いしませんでしたか？」
「どこでお会いしましたか？」
「5年前、アパートの前で倒れている人に会ったんです。あなたではなかったかと――」
「ああ！　思い出した。酔っぱらった私を助けてくれた君か」

「ええ、そうです」
「あの時は助かったよ、ありがとう。今日はどういったお話かな」
達哉はこの時、自分が思いがけない窮地に立たされていることに気付いた。そこで、こう聞いてみた。
「あの、ちょっとお聞きしたいのですが、娘さんは今どちらへ？」
「どこかで一人暮らしでもしてるんじゃないのか？　私も詳しいことは知らない。妻子と離れているのだから、あの時からずっと」
「そうですか、失礼しました」
「でもな、今はこうやってしっかり稼いでる。もしかしたらまた愛美と一緒に暮らせるかもしれねぇ。だって、俺が離婚した理由は俺の収入とか地位、肩書き、そんなものだったんだから」
「そうですね」
そう言いつつ、達哉は今、再び高橋健を、悲しみと苦痛に突き落とす立場にいることに気付いた。

達哉は家で父親に話した。
「A社に入るのはやめます。今日頼まれた仕事もやりませんでした」
「なぜそんなことをした？」
父親は息子を睨んだ。
「だって、あの工場が閉鎖されたら、たくさんの人が失業するんですよ」
「よくあることだ。敗者が出たのだ。この社会が資本主義であり、競争を基本原理とする以上、敗者が出ない方がおかしい」
「父さん、俺は今まで、競争に勝つことにばかり専念してきました。これは幸せなことだったのでしょうか？」
「幸せのためには、何よりもまず勝つことだ」
「そうかもしれません。でも、正直に言って、何もかも競争に埋め尽くされた人生はもういやなんだ。勝利に次ぐ勝利の行き着く果ては、荒涼とした、孤独で何も感じられないところなんじゃないかって、そんな気がするんだ」

「何をばかな」
「父さん、俺は、勉強で一番になるより、友達と遊んでいたかったよ。父さんから見ればくだらない漫画を読んでいたかったよ。勝つとか負けるとかが、自分の価値を決めるのではない、そういう人生を送りたかったよ。でも、父さんは俺が負けてしまったら、きっと俺のことを無価値な存在に見なすのだろう」
「まさか、そんなはずはない――」
「もう、今の俺には生きていく意味をなくしてしまったよ。何に喜びを感じればいいか、分からなくなった。何も感じないんだ、悲しみ以外に」
達哉は静かに椅子に座り、両手で顔を覆った。洋一は呆然と息子を見ていた。
ふと、電話が鳴って洋一は受話器を取った。A社の社長からだった。
「君の息子のことで文句があるんだがね」と浜田がいった。
「すいません、仕事をしなかったようで」
「そうだ。一体どういうことだね？」
「そちらの仕事には向いていないのでしょう」
「ったく！　一体どういう教育をしてきたんだ」
「私が今まで正しいと考えてきた教育方針は、必ずしも正しくなかったのかも知れない。なんにせよ、本当に申し訳なかった。ところでだね、君、光九町の工場の閉鎖は、本当に妥当な選択なのかね？」
「当然だ。コスト削減のためだ」
「そうか」
洋一は工場閉鎖を止める、手っ取り早い理由が思いつかなかった。電話は終わった。
「仕方ないさ」洋一は達哉にいった。「よくあることじゃないか。倒産、リストラ、よくあることだ。それとな、私が競争を重視したのは、それが子ども達を幸せにすると考えたからなんだよ」
洋一は競争という浅瀬で貝殻を拾っていたが、その向こうに深遠

で神秘的な海が広がっていることに目を向けなかったのである。
次の日、達哉はあの工場へ行った。何しに行ったのかと彼にきいても、自分でも理由ははっきりしないと答えただろう。ただ、もうすぐ閉鎖されるのだから、何か力になりたかった。
工場に着き、事務員にいった。
「あの、工場長の高橋健さんにお会いしたいのですが……」
事務員は答えた。
「あの方なら、昨日お亡くなりになられました。工場内の事故です」
達哉は硬直した。近くの労働者が付け加えた。
「もともと危険だったんですよ。だから改善してくれって会社に要請し続けてるのに、ずっと無視されてきたんだ。そんでついに、犠牲者がでちまった。それでもまだ、会社は改善しようとしねーんだ。俺達を人間として見てねえんだ」
達哉は深い怒りを感じた。
死んでしまった。
高橋愛美の父親はこの工場で！

達哉と愛美は、葬儀で再会した。達哉は愛美に、彼女の父親と初めて出会った時のことを伝えた。

それから後、達哉と愛美は時々会うようになり、１５歳の時に中断していた漫画の話をしたり、愛美の描いた漫画を達哉が読んだりした。達哉も漫画を描きたくなり、愛美に描き方を教わった。

「私、漫画家になりたいんだ」
「愛美ならきっとなれるよ、すごい面白いもん」
「ありがとう」

完

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2107k/

つらい時代

2010年10月8日15時05分発行